

## 美術の「趣味」化：大正期を中心とする民間への美術普及

今井, 寛子 / IMAI, Hiroko

---

(出版者 / Publisher)

法政大学大学院 国際日本学インスティテュート専攻委員会

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

国際日本学論叢 / Journal of International Japanese-studies

(巻 / Volume)

19

(開始ページ / Start Page)

1

(終了ページ / End Page)

26

(発行年 / Year)

2022-03-31

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00030991>

〈論文〉

# 美術の「趣味」化：大正期を中心とする民間への美術普及

今井 寛子

## はじめに

本研究は、美術評論家・黒田鵬心（本名：黒田朋信 [クロダ トモノブ]）（1885-1967）が主宰した雑誌『趣味之友』に着目し、明治末期から大正期において「美術」が美的感覚としての「趣味」を向上させるものとして、また「美術」鑑賞が「趣味」として楽しむものである、と認知されることで「美術」の概念が民間に普及した過程を考察する。

現在、「美術」という言葉は、美術展、美術館、美術鑑賞など日常的に使用されているが、この言葉の成り立ちは意外と新しい。1873（明治6）年に、日本政府がウィーン万国博覧会に初めて公式に参加した際、出品作品を分類するにあたり、ドイツ語“Kunstgewerbe”の訳語として「美術」という言葉を使用したのが始まりといわれている（北澤ほか 2014：69）。つまり、「美術」は西洋からの翻訳用語であり、「美術」という言葉が用いられるようになってから、日本における「美術」の概念が定義づけられていったのである。

近年、多くの著書・論文などが、明治政府主導で行われた「美術」に関係する機構や制度（博物館、東京美術学校など）の成立によって「美術」の概念は形成され普及したと指摘している（北澤 1989：260-313；佐藤 1999：23-42）。こうした明治政府主導による「美術」の制度化は、1907（明

治 40) 年の文部省展覧会 (文展) をもって一応の完成を見たといえよう (北澤 1989:300)。しかし、これらの研究は明治政府や、岡倉天心 (1863-1913)、九鬼隆一 (1852-1931) といった美術政策に携わった人物についての動向分析が中心で、作品制作者については、民間人にも触れている研究はあるものの、民間人による民間への「美術」の普及についての研究は少ない。

一方、「趣味」という言葉は「美術」という言葉と同様、現在日常的に用いられているが、頻繁に使用されるようになったのは明治 30-40 年代頃からである。この「趣味」を執筆活動のキーワードにしているのが美術評論家・黒田鵬心であった。

黒田は東京帝国大学哲学科 (美学専攻) 卒業後、読売新聞社で記者として文化欄を担当し、美術分野の評論を多く執筆した。新聞社を退社後、PR 誌『三越』の編集や美術商エルマン・デルスニス (1882-1941) と立ち上げた日仏芸術社にて展覧会事業と出版事業に取り組み、後年は私立専門学校の文化学院<sup>1</sup>や、東京家政大学の教授を歴任した。こうした仕事に携わる一方で、晩年まで精力的に雑誌や本の執筆活動、新聞への投稿を行い、多くの本や雑誌を自らも出版していた。

そこで本稿では、明治政府主導による「美術」の制度化がほぼ完成した後、すなわち明治末期から大正期に、黒田を中心とした民間人によって「美術」の概念がどのように民間に普及したかについて、「趣味」の観点から考察していく。

本稿では、まず、「趣味」という言葉の意味の変遷について概観し、明治 30-40 年代に「趣味」という言葉が頻繁に使用されるに至った背景について考察する。次に、坪内逍遙 (1859-1935) も関わった雑誌『趣味』(1906 年刊行) および、黒田が主宰した雑誌『趣味之友』(1916 年刊行) に焦点

---

<sup>1</sup> 西村伊作、与謝野晶子、与謝野鉄幹、石井柏亭らによって創設された、芸術や文学による人間教育を目指した学校。

を当てる。両雑誌は、文学、演劇など幅広い分野について論じているなかで「美術」についても論じており、「趣味」の領域で「美術」がどのように扱われたかを分析する。また、『趣味之友』を出版した趣味之友社は、雑誌の出版以外にも、商品販売、通信講座などさまざまな事業を展開して「美術」の普及に努めており、その事業にも注目したい。

なお、本稿では、基本的に、「美術」は、絵画、彫刻、建築、工芸を指すものとする。

## 2. 趣味と美術

### 2.1 「趣味」の意味変遷

現在、小学館の『日本国語大辞典第二版』（2000-2002）によると「趣味」は以下のように定義される。

- (1) 物事のもっているおもしろみ。味わい。おもむき。風趣。
- (2) 物事の味わいやおもしろみを感じ取る能力。また、それによる好み。感覚。センス。
- (3) 職業や専門としてではなく、楽しみとして愛好するもの。

また、「趣味」の定義について、神野由紀は (1) 「おもむき」 (2) 「taste」 (3) 「hobby」とし (神野 1994:13)、井村彰は (1) 「mood (atmosphere)」 (2) 「taste」 (3) 「hobby」とした (井村 2004:183)。このように「趣味」は概ね三つの意味で考えられているようである。

次に、「趣味」が複数の意味を持つようになった経緯や使用例を、神野や井村の先行研究も参照しながら、時系列順に見ていく。なお、本稿では「趣味」を (1) 「おもむき・あじわい」 (2) 「taste」 (3) 「楽しみ」という

定義で考察する。

「趣味」という言葉は、12-13世紀南宋の学者、葉適の『水心題跋』のなかで使われている（井村 2004：183）が、日本の文献で使われるようになったのは江戸時代からであり、使用例も非常に少なかった。この語彙の用例をたどった『明治文化史第10巻』<sup>2</sup>で紹介されているのはわずか三例であり、「趣味」は当時、「おもむき・味わい」といった意味合いでは使用されていなかったようである（香川 1955：4）。また、1891（明治24）年刊行の初の近代的国語辞典といわれている大槻文彦編『言海』にも、「趣味」という項目はない<sup>3</sup>ように、「趣味」は日常的な言葉ではなかったのだろう。

しかし、「taste」の意味合いで用いられる例は明治初期からあったようで、石井研堂（1865-1943）の『明治事物起源』では、明治期に発刊された書物において「趣味」の使用例がいくつか示されている（神野 1994：7-9）。また、当時、「taste」の翻訳語としては、他にも「趣致」「雅致」「嗜好」なども用いられていたが、結果的に「趣味」が学術用語として定着した（井村 2004：182）ことは、日本美術院から刊行された石井柏亭（1882-1958）ほか編の『美術辞典』（1914）の次のような記載内容からも明らかである。

#### しゅみ（趣味 Taste）

芸術家が芸術的表現に適応した材料を選ぶこととそれを高雅に取扱ふこととは芸術家の有つ趣味に負はねばならぬ。鑑賞家の側にあつては芸術品の善悪美醜を判ずること皆之れを其趣味に待たねばならぬ。人

<sup>2</sup> 本編のなりたちという項目において、「ややくどくはなるが、趣味・娯楽の語意・字義について、相当くわしくのべる」（香川 1955：2）と記されてある通り、『明治文化史』というタイトルにも関わらず、江戸時代までの「趣味」の使用例についても概観している。

<sup>3</sup> 『言海』（1891）において、じゅうほく（入木）、しゅみ（塵尾）、しゅみせん（須彌山）の順に並んでおり、「趣味」の小見出しは確認できなかった。

間趣味の高下は其遺伝感化教養の如何によって岐れる（石井ほか 1914：807）。

このように、「趣味」は芸術を味わう際に必要不可欠な感性を表す用語となっていくたが、「taste」を意味する「趣味」は学術用語としての意味合いが強く、一般に普及した言葉ではなかったようだ。

しかしながら、明治30年代中頃から40年代にかけて、「楽しみ」すなわち、愛好するものという意味合いで、「趣味」が急速に人々の間で使用されていったのである。以下は、雑誌『趣味』第1巻3号（1906）に掲載された、西本翠蔭（1882-1917）の「趣味教育」（井村 2004：187）と『明治事物起源』の「趣味の熟字」からの引用である。

近年までは趣味と云ふ字は余り多くは見当らなかつたが、近頃に至り新聞雑誌などに非常に多く用ゐられるやうになつた。つい此頃までは、趣味と云へばほんの一部の好事家が口にしたものであつたが、今では音楽の趣味とか、落語の趣味とか、この花は趣味があるとか、何にでも此文字がくつつくやうになつた（西本 1906：24）。

趣味と云ふ語は、明治四十年頃より盛に座談、平話にも使用せられ、月刊雑誌の題にも、趣味、趣味の友、釣魚趣味など種々に使用せり。（中略）今日の俗談平話の通り、古本趣味、玉突趣味、登山趣味などに用ひても、不当ならず（明治文化研究会 1969：115）。

「趣味」は専門用語ではなく、日常用語として人々の間に広がり、さらに、「趣味」の領域の対象として、音楽、落語、花、古本、登山などが挙げられ、「趣味」が、「楽しみ」の対象そのものを指すようになった。つまり、明治40年頃から次第に、「趣味」は、現在のように「hobby」を意味する言葉

で使われるようになってきた。

## 2.2 「趣味」ブームの時代背景

このように明治30年代半ばから40年代にかけて、「趣味」という言葉が頻繁に用いられるようになったのだが、その主な要因として次の二つが考えられる。一つ目は、急激な欧化主義、または欧化主義の反動として起こった国粹主義、への反発である。

日露戦争（明治37-38年）の勝利により不平等条約が撤廃され、日本は欧米に肩を並べる国として国際社会では認められるようになった。そのことによって、日本国内では、それまで西洋文化を積極的に導入していた明治政府の近代化政策に対し、欧化主義であるとの批判が起こり、日本古来の伝統的な文化や生活をもっと重視すべきであると主張する、国粹主義が広まった。また、明治政府の改革は、物質面ばかりであり、精神面は不十分であると批判されるようにもなった。そのような批判の一つに、夏目漱石（1867-1916）の講演「現代日本の開化」（1911）がある。漱石は、開化を、外側から強制された結果生じた「外発的開化」と、社会の内部から自然的な発展として生じた「内発的開化」との二つに分け、日本の開化を「外発的開化」ととらえた。つまり、維新後に生じた開化は、何百年もかけて形成された西洋の文化を、形式面だけを数十年で吸収してしまった、急なものであり、日本人の内面がその変化に追いついていないと指摘している（夏目1913：65-82）。

このような状況に対して、「趣味」を広めることで改善しようとした者がいた。それが、雑誌『趣味』の創刊号に寄稿した坪内逍遙である。逍遙は、日本と西洋の「趣味」は異なるものであり、両者ともに一長一短あると述べ、以下のように主張した。

要するに趣味は広く善悪美醜を甄別し評価する根底となるものゆゑ、今日の如き大變遷期に於ては最もその涵養に心を注がねばならぬ。政治上、社会上の改革即ち物質的の維新は一通り済んで今は精神上の維新に向ひ、宗教、道德、文学、芸術引括めていへば風俗上の大動揺が始まつたのであるから、ここ一段の注意が大切です。(中略) まことの趣味界の国体は欧化主義で定まるのでもなく国粹保存一点ばりで定まるのでもあるまい。随つて最も真正にして高大なる趣味を感知する力を導き養ふことが此の際尤も大切である(坪内 1906 : 3-4)。

逍遙は、「物質的の維新」が一段落したのでこれからは「精神上の維新」を行うべきであると述べている。これは漱石の意見とほぼ同じである。しかし、逍遙は、専ら西洋文化を取り入れる欧化主義、あるいは自国の文化を守ることに固執する国粹主義、そのどちらかに偏るのではなく、両文化の長所を判別する能力としての「趣味」を涵養することが重要である、とさらに一歩踏み込んでいる。逍遙は、「趣味」を通じて、西洋文化を自国の文化に消化・吸収できるような力を涵養することを人々に求めたともいえよう。逍遙が繰り返し用いている「趣味」は、「物事の味わいやおもしろみを感じ取る能力」の意味合いが強く、逍遙は「taste」の意味合いを念頭に、この言葉を使っていると思われる。

逍遙のこの試みを南博は、芸術といった「高級」文化の普及と、娯楽といった「低級」文化の向上を目標としたものであるとし、両文化の要素を取り入れた中間文化の創出を目指したと評した(南 1987 : 51)。つまり逍遙は、特定の階層ではなく、国民全体に「趣味」の普及を呼びかけたこととらえることができるだろう。この幅広い層を対象とした「趣味」すなわち、中間文化の創出には、次に述べる二つ目の要因と大きな関わりがあった。

明治 30 年代半ばから 40 年代にかけて、「趣味」が頻繁に使用されるに至っ

た二つ目の要因は、新中間層<sup>4</sup>の台頭と、それに伴う日本の都市部における近代的な消費社会の成熟であり、その近代的な消費社会の象徴は、この時期に誕生した百貨店である。

神野は、百貨店とは商品を媒介として「良い趣味」を提供する場であり、かつ、存在そのものが「趣味」であったと述べ（神野 1994：12）、新中間層は、不安定な階層であるがゆえに上昇志向が強く、上流階級に少しでも早く追いつくため、時間をかけて教養を磨くのではなく、百貨店を訪れ商品を購入することで手っ取り早く「良い趣味」を身にまとうとしたと指摘した（神野 2015：38-39）。つまり、近代都市において自分自身の存在を確立し、社会的地位をさらに向上させるために、「趣味」は必要不可欠なものであると考えられていたことがわかる。しかし、逍遙が提唱した「趣味」は、逍遙が願った涵養するものから、「手っ取り早く」外から獲得するもの、つまり、社会的地位向上の手段となってしまった。例えば、三越百貨店が仕掛けた元禄模様と光琳ブームに代表されるように、百貨店は、より幅広い層を対象とした中間文化の創出、すなわち「趣味」の普及に大きな役割を果たしたのである。だが、百貨店における「趣味」はあくまで販売戦略であり、消費者にとって、娯楽的要素が強かった「趣味」は、商業化された「趣味」にすぎなかった。

「趣味」という言葉は大正期に入っても頻繁に用いられたようである。例えば、1916年刊行の『新公論』31巻7号では、特集として趣味篇が設けられ、総勢37名が「趣味」について執筆している。そのなかで黒田鵬心は以下のように述べている。

近頃趣味といふ言葉が非常に多く使はれるやうである。本誌が「趣味

---

<sup>4</sup> いわゆるホワイトカラーと呼ばれる会社員を指す。神野によると、新中間層は地方の下級士族出身者が多かった。（神野 2015：38）。

号」を發刊するのも其の一つであるが、或は「趣味の日本史」とか、或は「海の趣味」とか云ふ書籍も出れば、余のやつてゐる「趣味之友」を始めとし、五月から「趣味の世界」といふのが創刊され、「家庭と玩具」は「家庭と趣味」と改題した。僅かの中に趣味を標榜する雑誌が三つ出来た訳である（黒田鵬心 1916a：13-14）。

黒田が主宰した『趣味之友』も含め、「趣味」を冠した雑誌が次々出たことから、大正期に入っても「趣味」への関心が高かったと思われる。

以上のように、欧化主義とそれへの反発としての国粹主義の台頭に対して、「趣味」の向上によって両者の対立を克服する論も唱えられた。「taste」にすぎなかった「趣味」は近代消費文化のなかで「hobby」となり、百貨店などで手軽に手に入れられるものとなった。このようにして、「趣味」は短期間で複数の意味を帯びるようになったのである。次節以降では、雑誌『趣味』および『趣味之友』を媒体として、「趣味」の領域において「美術」がどのように論じられているのか、「趣味」の意味に留意しながら考察する。

### 2.3 雑誌『趣味』

雑誌『趣味』には、1906（明治39）年6月から1910年7月までに刊行された第1次『趣味』と1912（明治45）年6月から1914（大正3）年1月までに刊行された第2次『趣味』がある。創刊当初の出版社は、歌人の岡三郎（麓）が経営した彩雲閣で、編集は坪内逍遥門下の東儀鉄笛、水口薇陽、土肥春曙らの演劇団体である易風社が行った（勝山 1977：160；尾形 1986：7）。本誌の発行主旨は「音楽、演劇、話術、絵画、建築、庭園、装飾、遊戯、流行等に関して一世の指導者となり兼ねて理想的読物と娯楽とを家庭」（彩雲閣 1906：にの三）に提供すること、と定めている。

本稿では、「美術」に関する記事が比較的多い第1次『趣味』に着目する。第1次『趣味』の誌面構成は当初、「趣味」「名家談」「脚本小説」「雑録」「彙報」で構成されていたが、途中から誌面の構成が大きく変化し、小説が「本欄」として誌面の巻頭に移った頃から、文学雑誌としての色合いが濃くなっていった。しかし、美術分野は引き続き取り上げられており、毎号の「彙報」では、展覧会の開催など美術界における時事的な情報が掲載されていた。さらに、「博覧会出品画評」（第2巻6号）や摺師・西村熊吉の「洋画の印刷」（第3巻2号）、あるいは、牧野富太郎（1862-1957）の「植物学者の眼に映じたる展覧会の絵画」（第4巻12号）など美術分野の文章が掲載される号もあった。また絵画の図版も、写真版・木版・石版などさまざまであったが、雑誌『趣味之友』と比べると、多かった。

次に、雑誌『趣味』のなかで、①日本画の将来、②絵葉書、に焦点を当て考察していく。

### 2.3.1 日本画の将来

「日本画」という言葉は、1882（明治15）年にアーネスト・フェノロサ（1853-1908）の講演で用いられた“Japanese painting”“Japanese pictures”の翻訳語として採用されたことがきっかけで広く用いられるようになったとされている（北澤 2005：156-157）。佐藤道信は「伝統絵画を示す「日本画」じたいが、西洋からのイメージ（英語）の反転（翻訳）として成立した」（佐藤 1996：77）と評しており、「日本画」という概念は、明治期に西洋（欧米）の絵画が本格的に入ってきたことにより成立したといえよう。その後、「日本画」は1880年代末から1900年代にかけて美術雑誌で取り上げられるようになり、1907（明治40）年の文部省美術展覧会（文展）において、「日本画」「西洋画」の部が設定され、制度上も確立された。

雑誌『趣味』第2巻1号から3号において、日本画家の梶田半古（1870-

1917)、川合玉堂 (1873-1957)、洋画家の川村清雄 (1852-1934)、洋画家で書家の中村不折 (1866-1943) が、将来の「日本画」への危機感を表明している。半古は「日本画」における安易な西洋技法の導入に対して、否定はしていないが、深く考えないまま取り入れると日本独自の要素が損なわれると危惧している (梶田 1907:51-52)。玉堂は、西洋の影響を受けた「日本画」は、展覧会に出品されても終了後に無用の長物になっており、「今日の儘にしてすておきましたらば折角進みかけた邦画も旧趣味の応用需要といふ鉄条網の為に阻害されるとは明です」(川合 1907:59-60) と指摘し、日本古風の建築に合わせて作られた掛物、額、屏風の「日本画」は重宝されているが、洋風を取り入れたものや従来規格にとらわれない作品は受け入れられていないと主張している。さらに玉堂は、製作者本人だけでなく、鑑賞者にも新趣味を涵養することを求め、新趣味が受け入れられる素地を作るべきだと訴えている。半古や玉堂らが用いた、「趣味」は、前節で述べた「taste」の意味と解することができるだろう。

### 2.3.2 絵葉書について

日本での官製葉書の販売開始は 1873 (明治 6) 年で、日本は 1877 (明治 10) 年に万国郵便連合に加盟した。私製葉書の使用が 1900 (明治 33) 年に逓信省から認可されると、少年誌などの雑誌の附録として絵葉書作られるようになったが、絵葉書を本格的に広めたのは、日露戦争の戦役記念絵葉書であった。日露戦争期の絵葉書ブーム以降、絵葉書屋が増加し、人物絵葉書や風景写真絵葉書などのさまざまな絵葉書が販売された (細馬 2006:19-21)。

そのなかで、絵葉書ブームを牽引し、その普及に貢献したのは日本葉書会であった。大手出版社である博文堂の印刷工場の敷地内に 1904 (明治 37) 年 4 月、大橋光吉 (1875-1946) によって設立され、絵葉書の発行と

ともに、月刊機関誌『ハガキ文学』を創刊した（向後 2010：61-63）。同誌の名誉会員には、蒐集家だけでなく、絵葉書作成に携わった画家たちも多く名を連ね、ジャンルは洋画、日本画、浮世絵と多岐にわたった。また、広く絵葉書図案の投稿を募り、画家を志す若者にとっても貴重な作品発表の場であった。彼らのなかにはのちに画家として多くの書籍の装丁をも手掛けた、竹久夢二（1884-1934）もいた（向後 2010：73-76）。

大橋は、『ハガキ文学』の「発行の辞」において、本雑誌の発行目的を、絵葉書を単なる通信のための道具ではなく「美化し趣味あるもの」にすることで、絵葉書を見る人が慰めを得ること、また、本来人が持っている純粋な気持ちを引き起こすこと、と述べている（向後 2010：62）。大橋がここで絵葉書を趣味と結びつけて語っているのは興味深い。

また、『ハガキ文学』において、絵葉書の流行について、国文学者の芳賀矢一（1867-1927）は以下のように述べている。

絵葉書は美術と実用との両方面を兼ねたもので、一種の美術工芸品である。しかも最も低廉な美術工芸品である。多くの美術工芸品は頗る高価なもので、富裕な人でなければ、賞玩する事が出来ないが、絵葉書は貧乏人でも、小供でも容易く、手に入れることが出来て、これ程安くて、これ程高尚な娯楽を供給するものは外に無からうとおもふ（芳賀 1906：25）。

絵葉書は大衆にとっても手軽に入手できる「一種の美術工芸品」であった。絵葉書がブームの頃に刊行を開始した雑誌『趣味』においても、絵葉書に関する文章が複数掲載されている。以下では、三つの文章に言及する。

一つ目は、「絵葉書漫評」（第1巻1号）である。印刷絵葉書が流行により濫造されるさまを執筆者は苦々しく思っており、「印刷絵葉書は玉石混

交悉く声価を落すに至つた」(「絵葉書漫評」1906:146)と批判している。さらに、記念絵葉書の項目では「売出の日の如きは、前夜の十一時から詰かけ、翌日午前七八時頃蓋を開けた時には群衆が雑鬧して死人怪我人を出すといふ大騒ぎ」(「絵葉書漫評」1906:147)と述べ、今が「絵葉書流行の行止り」(「絵葉書漫評」1906:148)であると締めくくり、暗に、もうじき絵葉書ブームは終わるだろうと冷ややかに見ている。

二つ目は、市川高麗蔵の「絵葉書」(第2巻6号)である。本文章の掲載時期から、高麗蔵は後の七代目松本幸四郎(1870-1949)であると考えられる。高麗蔵は、絵葉書を流行以前から集めており、高値で買ったものがブームにより安く買えるようになった現状に複雑な気持ちを抱いたようであるが、「けれ共これまで集めた物ですから、今日でもいゝ物さへ見つかれば矢張集めて居ます」(市川 1907:15)と、現在も絵葉書を蒐集中であることを明かしている。

三つ目は、池端真美堂主人の「美人と絵葉書」(第4巻2号)である。絵葉書を売り始めた頃の苦労話や、絵葉書が最も売れる季節など、絵葉書の販売者ならではの視点で書かれている。絵葉書の今後の展望については「只今よりも絵葉書の流行が衰へるやうなことは万有るまい」(池端真美堂主人 1909:28)と述べており、絵葉書の流行の先を悲観していた記事とは対照的である。美人物の絵葉書に関しては写真付で、昔と今の流行の比較、さらに将来の流行予想、顧客層、売れ行きなどが語られている(池端真美堂主人 1909:32-38)。

日露戦争後に絵葉書蒐集熱が人々の間で高まり、その後、絵葉書ブームがいったん落ち着いてからも、なお一定の需要があり、美術界と密接な関わりを持った絵葉書は、一種の「hobby」として人々に楽しまれていたようである。

このように、雑誌『趣味』は「美術」を「taste」と「hobby」の二つの

面から取り上げ、日本画といった専門性の高い内容から、絵葉書といった当時の流行まで、さまざまな題材をテーマに掲載していた。特に、当時の多くの人々にとって絵葉書は物質的消費の対象であり、百貨店の販売戦略と同様、商業化された「趣味」であったことがわかった。しかし、雑誌『趣味』は、掲載するジャンルの幅が広すぎて、どの読者層を想定して何を目指していたのか不透明だった。「音楽、演劇、話術、絵画、建築、庭園、装飾、遊戯、流行等」の情報を提供するという点では、創刊号に掲載された発行の趣旨を達成していたが、逍遙が目標としていた趣味の涵養を図るという点については、あいまいなまま終わってしまったようである。

## 2.4 雑誌『趣味之友』

雑誌『趣味之友』は、1916（大正5）年1月から1918（大正7）年10月まで全33巻、趣味之友社から発行された月刊誌である。編集主幹は、創刊号から17号までは黒田鵬心で、18号以降は吉田鼓山（本名は金之助）に変わった<sup>5</sup>。『趣味之友』は「岩村男<sup>6</sup>の命名されたもの」（黒田鵬心1916a：14）という記述から、おそらく黒田と親交があった美術評論家の岩村透（1870-1917）によって命名されたと思われる。本雑誌は、趣味（美術、工芸、装飾図案、演劇、音楽、舞踊、服飾、演芸、其他娯楽）の普及向上を図り、日常生活を豊かにすることを目標に掲げており（趣味之友社1916：前附の五）、雑誌『趣味』と同様に、記事の分野や寄稿者もさまざまであった。のちに黒田が就職する、三越百貨店に関わりがある人物による寄稿も散見される。雑誌の表紙は、17号までは図案家の杉浦非水（1876-1965）が、それ以降は、日本画家の山村耕花（1885-1942）、版画家の織田

<sup>5</sup> 主幹を辞したのちも、黒田は雑誌『趣味之友』にたびたび寄稿している。

<sup>6</sup> 岩村男は岩村透男爵の略称であると推測される。なお、雑誌『新公論』において、岩村透の文章のすぐ後に、上記で引用した黒田の文章が掲載されていることから、岩村透と考えるのが自然であろう。

一磨（1882-1956）などが担当した。現時点では、『趣味』と『趣味之友』に直接的な関係性は見当たらないが、『新公論』（1916）に、黒田が『趣味』に言及する記事を書いていたことから、『趣味』の存在を認知していたことは明らかである（黒田鵬心 1916a：14）。

本稿では、美術分野の記述が特に多い、黒田が主幹を務めていた時期の『趣味之友』、すなわち、創刊号から17号までを見ていく。誌面構成は『趣味』のように細かく区分されておらず、巻頭に黒田鵬心が自らの意見を述べる「趣味講壇」が、巻末に読者から募集したカット（図案）があり、記者のコラムに相当する月評、時事的情報の月報、新刊紹介などが掲載されていた。創刊号に、本雑誌の賛助員芳名として21名が掲載されているが、前述した岩村透、杉浦非水の他に、美術史家の瀧精一（1873-1945）、日本画家の鏑木清方（1878-1972）、洋画家の黒田清輝（1866-1924）、南薫造（1883-1950）、和田英作（1874-1959）、建築家の伊東忠太（1867-1954）、中條精一郎（1868-1936）、建築学者の関野貞（1868-1935）、塚本靖（1869-1937）、建築家で建築学者の武田五一（1872-1938）がおり（「発刊の趣旨」1916：前附の五）、建築関係者が含まれていることが特徴である。これは、「建築評論家」とも呼ばれる黒田の影響が大きいと思われる。

また、黒田が主幹を務めていた時期の『趣味之友』の方が、『趣味』よりも美術の分野の比重は大きいものの、美術に関しての「趣味」については、どちらも同様に、「taste」と「hobby」の二つの面からアプローチした記事・文章が掲載されている。「taste」の面で語られた例としては『趣味之友』創刊号に掲載された、黒田清輝の「趣味としての西洋画」がある。黒田清輝は、日本画を含む東洋画に相對するものとしての西洋画について、その特殊な「趣味」つまり「taste」を説明し、西洋画の「趣味」を理解するためには西洋画の観方を知る必要があると述べている（黒田清輝 1916：33-34）。作品を鑑賞する者への努力を求めた黒田清輝の主張は、雑

誌『趣味』で、作品を鑑賞する者に新たな「趣味」への理解を求めた日本画家の川合玉堂の主張に通じるものがある。

続く2号では、建築家の伊東忠太による「成功に近き和洋趣味の融和：明治神宮宝物殿の当選設計」と題した文章が掲載されている。伊東は、明治神宮宝物殿の懸賞で一等を獲得した、宮内省内匠寮技手の大森喜一の設計案を、和洋趣味の観点から成功に近いと高く評価している（伊東 1916：30-31）。和洋趣味の融合に重きを置いた伊東の主張も、日本と西洋文化の長所を取り入れようとした坪内逍遙の考えと重なるところがある。

一方、雑誌『趣味之友』において、「hobby」の面で語られていた美術分野の「趣味」に関する文章は、主に月評などの記者のコラムに掲載されている。しばしば、百貨店の展覧会や商品に関する記事が載っているが、背景には、さまざまな「趣味」すなわち「hobby」を生み出していた百貨店に、執筆者、読者双方ともに関心が高かったことに加え、後述するように趣味之友社が商業的な「趣味」を取り扱うことに積極的だったことがあると思われる。また、「taste」と「hobby」のどちらに属しているとは断定はできない美術関連の記述も多数あり、内容は多岐にわたっていた。

そのうち①雑誌『趣味之友』における「趣味」への問題意識、②出版社「趣味之友社」の事業展開、③雑誌『趣味之友』から「趣味講座」へ、の三点に注目して考察していく。

#### 2.4.1 雑誌『趣味之友』における「趣味」への問題意識

雑誌『趣味之友』は、「趣味」の普及と向上を目標として掲げていた通り、当時の人々の「趣味」のあり方について問題意識を強く持っていたようで、創刊号と2号で、「現代の趣味について」のアンケートを実施している。趣味を最もよく象徴するものとしては、三越、帝劇、カフェー、服飾などの回答があり、趣味の観念には幅があったことがわかる。また、当時の人々

の趣味について否定的な意見もあり、例えば、美術（絵画）に関しては、かつて三越百貨店でさまざまな経営改革を行った高橋義雄（1861-1937）が「日本人の美術上に対する趣味鑑賞がどうも絵草紙並みだね。趣味を向上させると云ふ事については、現代の美術趣味には不平である」（「現代の趣味について（下）」1916：29）と批判している。

「趣味」の普及と向上を目指していた黒田は、巻頭には必ず「趣味講壇」を掲載した。とりわけ、3号と4号と続けて掲載された「趣味教育に就いて」では、黒田の考えが明確に記されている。黒田は、趣味を遺伝、胎教、家庭教育、社会教育によって左右されるものと論じ、年齢ごとの趣味の教育について助言している。ここで着目すべき点は、「趣味」は教育によって向上できるもの、と述べた点である（黒田鵬心 1916b：2-5）。雑誌『趣味』は、趣味の涵養を目標としていたものの、どの層に対し、どういう趣味の涵養を、どのように図るのか、具体的に提示していなかったが、黒田は『趣味之友』において、「趣味」の普及と向上には教育が必要である、という具体案を示したのである。美術分野に限っていえば、文展について特集を組んだ号の「趣味講壇」で、黒田の「絵画の観方一附り 彫刻と建築の観方一」が掲載されており、具体的な鑑賞法が提示された。

## 2.4.2 出版社「趣味之友社」の事業展開

趣味之友社は、雑誌『趣味之友』以外にも、美術分野においてさまざまな事業を展開し、時には催し物も開いた。代表的な事例を三つ挙げる。一つ目は、絵葉書関連の事業・企画である。例えば、2号には、趣味之友社で開催された年賀絵葉書展覧会の概要が掲載されている。杉浦非水や鏑木清方の作品も含めて、出展総数は計300点であったこと、急な開催で、案内状も20名から30名ほどにしか送らなかったにも関わらず、2日間の開催期間中に100余名も集まったことが記されている（五重塔 1916：108）。

当時、年賀絵葉書への関心が高かったことがうかがえる。さらに、趣味之友社は「趣味」の商業化に伴い、絵葉書の通信販売に乗り出している。特に、杉浦非水の図案絵葉書は「日本製のあらゆる絵葉書の中で最も趣味高きもの」（広告「非水図案絵はがき」1916：後附の七）と宣伝し、販売した。二つ目は、額面用泰西絵画彫刻集の販売で、以下はその宣伝文である。

額面に入れて壁間に懸くれば好箇の装飾となる。殊に数枚を求めて代る代る入れ換ふれば最も妙なるべし。作品の選択は某大家に依嘱し豊富なる材料の内より厳選せしものなれば、美術的参考としても十分の価値あり。美術愛好者は勿論、趣味ある人上の満足を得るや必せり（広告「額面用泰西絵画彫刻集」1916：後附の五）。

泰西（西洋）絵画彫刻集にはクロード・モネ（1840-1926）やエドガー・ドガ（1834-1917）ら印象派の画家の作品も含まれていた。これらは、商業化された「趣味」に対する新中間層の需要を見込んで販売されたと推測されるが、のちに黒田が日仏芸術社で地方都市でのフランス美術展の開催に尽力したことを踏まえると、黒田は欧化主義や国粹主義といった思想にとらわれずに、西洋美術と接する機会を提供したかったのではないかと考えられる。すなわち、黒田にとって「趣味」を通じた美術普及とは、日本美術と西洋美術の両方を人々に広めることを指していたといえよう。

三つ目は、杉浦非水図案のステインド硝子衝立の販売で、「モザイク式ステインド硝子の趣味を發揮したる室内装飾品にして又新趣味の家具として広く之を江湖に薦む」（広告「ステインド硝子」1916：後附の二）と宣伝している。

黒田を含め『趣味之友』の編集に関わっていた人々は、絵葉書、絵画彫刻集、ステインド硝子衝立などの作品販売を通して、自分たちが抱く理想

の「趣味」を、人々に幅広く伝えようとしていたと十分に考えられるが、作品販売を行うのは収益が見込めるから、という商業的な打算があったとも考えられるので、結果として「趣味」の商業化が行われたといえよう。

#### 2.4.3 雑誌『趣味之友』から「趣味講座」へ

「趣味講座」は、1917（大正6）年から開始された、会員制の定期配本による通信講座の類である。黒田は、読売新聞社を退社したのち、趣味叢書発行所、趣味之友社、趣味普及会の3つの出版社を順に立ち上げているが、「趣味講座」は、趣味之友社で開始し、その後、趣味普及会に移管した事業である<sup>7</sup>。

「趣味講座」は、美学及芸術学概論、演劇通論、音楽通論、文学通論、建築通論、工芸美術通論、日本の絵画、欧州の絵画、日本の彫刻、西洋の彫刻、大日本美術史の11科目に分かれており、黒田自身は、美学及芸術学概論と大日本美術史を担当した。本講座の内容は、「趣味講座叢書」シリーズとして、1918（大正7）年から1922（大正11）年にかけて、科目別に趣味普及会から出版された<sup>8</sup>。

「趣味講座」の開設は、『趣味之友』第7号で発表され、会員募集の広告が掲載された。開設の趣旨に「雑誌と云ふものゝ性質上、秩序や系統ある趣味の講話が出来ず、其の点は切に遺憾に感じて居ました」（広告「趣味講座」1916：本文前の四）と記されており、また第46号において「大日

<sup>7</sup> 趣味之友17号には「忙しくなったので、とても『趣味之友』と『趣味講座』とをやる事は出来ない」（黒田1917：81）、「『趣味之友』を趣味之友社と、共に吉田鼓山君へと譲る事もほゞきまり、（中略）余は『趣味講座』丈けやればいゝ事となった。」（黒田1917：82）と記されている。つまり、多忙により雑誌『趣味之友』と『趣味講座』の両立が厳しくなった黒田は『趣味講座』のみ担当することが決まったようである。こうして、『趣味講座』のみ分離して黒田の「趣味普及会」に引き継がれた。

<sup>8</sup> ただし、国立国会図書館に所蔵されているのは、6科目に留まり、全ての科目が『趣味講座叢書』として出版されたかについては現時点で不明である。

本美術史」の一部を掲載したものの未完のまま掲載を断念していることからしても、さまざまな科目を体系的に論じたり、同一のテーマを集中的に論じたりするには、雑誌は不向きであると判断したようである。広告には、趣味講座の五大特色として以下のように記されている。

- 一、広き意味に於ける芸術の各科を網羅したる講義録は、世界中に本講座あるのみ。
- 一、絵画彫刻の外は東西を打つて一丸とし、各種芸術の本質を説明するに努め、歴史は例証として挙ぐる方針なり。
- 一、講師は何れも所謂大家に非ざるも、総べて新進の実力ある士なれば、徒に大家の名を掲げて其の実なきものと選を異にす。
- 一、説明は平易、文章は平明を主とするも、内容に於いては大学講義に恥ぢざるもの也。
- 一、芸術家、芸術鑑賞家、芸術愛好家等の必読すべきは論を俟たず。一般紳士淑女の修養としても好適なる講義録なり（広告「趣味講座の五大特色」1916：前附の一）。

本講座の特筆すべき点は、建築、工芸、絵画、彫刻のように美術分野の科目が特に多いこと、多彩な講師陣、不特定多数の読者層である。美術分野の科目の多さは、黒田の交友関係が反映された可能性もあるが、黒田の美術重視の姿勢が表れた結果だろう。10名の講師陣のなかで、美術学校関係者は、水谷鐵也（1876-1943）、森田亀之輔（1883-1966）の2名だったものの<sup>9</sup>、残りの8名はいずれも東京帝国大学出身で学業を修めた人物だった。広告に、講師陣は大家でないとされているが、演出家・劇作家・小説家の小山内薫<sup>10</sup>（1881-1928）、東洋音楽研究者でのちに文化功労者に選ば

<sup>9</sup> いずれも東京美術学校関係者であり、当時水谷は教授、森田は講師であった。また、水谷は「西洋の彫刻」、森田は「西洋の絵画」の講義を担当した。

<sup>10</sup> 「演劇通論」を担当

れた田邊尚雄<sup>11</sup> (1883-1984)、東洋陶磁研究に尽力し国宝保存会委員・文化財専門審議会委員などを歴任した奥田誠一<sup>12</sup> (1883-1955)、能楽研究者・建築家の山崎楽堂<sup>13</sup> (1885-1944) など、専門分野でのちに第一人者と称された、あるいは大きな業績を残した人物ばかりであった。読者層は、芸術分野に造詣が深い人々に限らず、専門的知識のない人々を想定していた。本講座は『早稲田文学』といった学術雑誌だけでなく、大衆紙の『萬朝報』や地方紙の『小樽新聞』でも紹介されており、全国への広がりには確実にあったと思われる (広告「趣味講座の五大特色」1916：前附の一)。

以上、本節では、雑誌『趣味之友』を、①雑誌『趣味之友』における「趣味」に対する問題意識、②出版社「趣味之友社」の事業展開、③雑誌『趣味之友』から「趣味講座」へ、の三点から見てきた。『趣味之友』が取り扱う美術分野もさまざまではあったが、『趣味』に比べると、美術分野にはより力を入れていた。黒田が主宰した趣味之友社は、雑誌を出版するだけでなく、商品販売も手掛け、時には展覧会を催し、さらに、芸術分野全般を体系的に論じた「趣味講座」を開いた。事業を多く展開しながら「趣味」の普及と向上を図ったのである。

国語学者の上田萬年 (1867-1937) は、『趣味之友』創刊号で、社会の多数を占める中流社会に属する人々 (中間層) の趣味を涵養する必要性を訴え、その点において、黒田の事業は有益であると評している (上田 1916：28-29)。絵葉書をはじめとする商品を販売したのは、理想の「趣味」を中間層にもわかりやすく提示しようとしたからだと考えられる。

上田は同号で「黒田君の事業は趣味の総合大学を作らうとの考だと思ふ。一部々々の高等専門学校的のものでなく、芸術の各部を総合して教育する

---

<sup>11</sup> 「音楽通論」を担当

<sup>12</sup> 「工芸美術通論」を担当

<sup>13</sup> 「建築通論」を担当

趣向と思ふ」（上田 1916：29）と述べているが、黒田の思いは「趣味講座」で実現したといえよう。「趣味講座」のキャッチコピーの一つに「芸術大学は此の講座によりて建設されたり」（広告「趣味講座の五大特色」1916：前附の一）とあるが、特定分野に偏るのではなく、芸術全般、美術全般を総合的に普及しようとした意図が読み取れる。

上田は最後に以下のように述べ、黒田に注意を促しつつ、事業成功を祈願している。

併し事業はいつも困難であるから、事業の経営の上に於いては十分の勉強をされて、好事の事業に非ずして、通俗教育、若しくは社会教育上の一大貢献事業として、成功されん事を切に望む者である（上田 1916：29）。

上田は好事家だけでなく、より幅広い層を対象に事業を展開することの困難さを語っている。確かに「趣味講座」については、大衆紙や地方紙で推薦文が掲載されており、『趣味之友』の「来簡」（読者欄）では、札幌、山梨、埼玉、京都からの手紙が紹介されているので、黒田の事業は全国規模の広がりを見せたとはいえよう。しかし、好事家以外の層にどの程度広まったかは、依然として不透明なところが多い。しかも黒田は、「趣味講座」以外の趣味之友社の事業を、開始から約1年半で吉田鼓山に引き継いでしまっている。その結果、雑誌『趣味之友』は、個々の趣味に焦点を当てるようになり、わずかに33号で終わってしまった。幅広い層を巻き込んだ事業展開はやはり難しかったように思われる。

## おわりに

雑誌『趣味』および『趣味之友』はともに「趣味」を、現在も使われている「taste」と「hobby」の意味合いでとらえ、「美術」を含めさまざまな「趣味」の分野に関し、専門性の高い内容から当時の流行といった身近な内容まで幅広く掲載した。また、両雑誌で取り上げられた絵葉書は、「高尚な娯楽」とも評され、結果として、民間に、日本画や西洋画といった絵画（美術）を普及する役割を担ったといえるだろう。しかし、両雑誌とも刊行期間が短期間であったので、「美術」の民間への普及の程度は限定的だったことは否めない。

雑誌『趣味之友』を発行した趣味之友社は、前述した絵葉書をはじめとするさまざまな美術関連の商品販売に加え、「趣味講座」の開講に着手するなど、多彩な事業展開を行った。こうした事業の背景には、商業化された「趣味」の需要の高まりにより、「趣味」の領域に取り込まれた「美術」が「hobby」の要素、つまり、娯楽性の要素を強めたことなどが考えられる。特に、趣味之友社が販売した絵葉書は比較的安価で購入が容易なため、まさしく商業化された「趣味」として多くの人々に楽しまれ、民間への「美術」普及という点で大きな役割を果たした。ただ、趣味之友社が主催した「趣味講座」の明確な業績は残念ながらあまり残っていない。

このように、雑誌『趣味之友』全33巻のうち黒田が主幹を務めたのは17号までであったこと、「趣味講座」の業績が後世に残っていないこと、を考えると、黒田は「趣味」を通じて「美術」の概念を民間へ広げようと活動したが、その目的を十分に果たせなかったといえよう。しかし、「美術」の民間への普及の試みは、昭和期に流行した、平凡社の「世界美術全集」（円本全集）などに受け継がれていった。明治期末から大正期にかけて、民間人である黒田は、はっきりとした結果は出せなかったかもしれないが、

「美術」の概念が民間に受け入れられるようさまざまな活動をしたことは事実であろう。

#### 参考文献

- 池端眞美堂主人 1909「美人と絵葉書」『趣味』第4巻2号：27-38頁 東京：易風社  
石井 柏亭ほか編 1914『美術辞典』東京：日本美術学院  
市川 高麗蔵 1907「絵葉書」『趣味』第2巻第6号：14-15頁 東京：易風社  
伊東 忠太 1916「成功に近き和洋趣味の融和：明治神宮宝物殿の当選設計」『趣味之友』2号：30-33頁 東京：趣味之友社  
井村 彰 2004「趣味の領分—雑誌『趣味』における坪内逍遙・西本翠蔭・下田歌子」『日本の近代美学（明治・大正期）』：182-191頁  
上田 萬年 1916「趣味の涵養と本誌の使命」『趣味之友』1号：24-29頁 東京：趣味之友社  
易風社・彩雲閣 1906「『趣味』発行の趣旨」『趣味』第1巻1号：にの三 東京：彩雲閣  
「絵葉書漫評」1906『趣味』第1巻1号：145-148頁 東京：彩雲閣  
尾形 国治 1986「趣味解説・総目次・索引」『趣味 復刻版』別巻 東京：不二出版  
香川 鉄蔵 1955「趣味娯楽編」開国百年記念文化事業会編『明治文化史 第10巻』東京：洋々社  
梶田 半古 1907「日本画の将来」『趣味』第2巻1号：51-55頁 東京：彩雲閣  
勝山 功 1977「趣味」日本近代文学館編『日本近代文学大事典第5巻（新聞・雑誌）』：160-161頁 東京：講談社  
川合 玉堂 1907「日本画の将来」『趣味』第2巻1号：55-60頁 東京：彩雲閣  
北澤 憲昭 1989『眼の神殿—「美術」受容史ノート』東京：美術出版社  
北澤 憲昭 2005『境界の美術史—「美術」形成史ノート』国立：ブリュッケ 東京：星雲社（発売）  
北澤 憲昭・佐藤 道信・森 仁史編 2014『美術の日本近現代史：制度・言説・造型』東京：東京美術  
黒田 清輝 1916「趣味としての西洋画」『趣味之友』1号：30-34頁 東京：趣味之友社  
黒田 鵬心 1916a「趣味の普及と向上」『新公論』31巻7号：13-15頁 東京：新公論社  
黒田 鵬心 1916b「趣味講壇 趣味教育について」『趣味之友』3号：2-15頁 4号：2-11頁 東京：趣味之友社  
黒田 鵬心 1917「青山居日録」『趣味之友』17号：80-83頁 東京：趣味之友社  
「現代の趣味について」1916『趣味之友』（上）1号：12-23頁（下）2号：18-29頁 東京：趣味之友社

- 広告「額面用泰西絵画彫刻集」1916『趣味之友』5号：後附の五 東京：趣味之友社  
 広告「趣味講座」1916『趣味之友』7号：本文前の四 東京：趣味之友社  
 広告「趣味講座の五大特色」1916『趣味之友』14号：前附の一 東京：趣味之友社  
 広告「ステインド硝子」1916『趣味之友』5号：後附の二 東京：趣味之友社  
 広告「非水図案絵はがき」1916『趣味之友』7号：後附の七 東京：趣味之友社  
 向後 恵里子 2010「日本葉書会一日露戦争期における絵葉書ブームと水彩画ブーム  
 をめぐって」『学術研究・複合文化学編』58号：59-90頁 東京：早稲田大学教育会  
 五重塔 1916「本社の年賀絵葉書展覧会」『趣味之友』2号：108頁 東京：趣味之友  
 社  
 佐藤 道信 1996『＜日本美術誕生＞—近代日本の「ことば」と戦略』東京：講談社  
 佐藤 道信 1999『明治国家と近代美術』東京：吉川弘文館  
 趣味之友社 1916「発行の趣旨」『趣味之友』1号：前附の5頁 東京：趣味之友社  
 神野 由紀 1994『趣味の誕生—百貨店がつくったテイスト』東京：勁草書房  
 神野 由紀 2015『百貨店で＜趣味＞を買う 大量消費文化の近代』東京：吉川弘文館  
 坪内 逍遙 1906「趣味」『趣味』第1巻1号：1-4頁 東京：彩雲閣  
 中村 不折 1907「画界漫語」『趣味』第2巻3号：44-49頁 東京：易風社  
 夏目 漱石 1913「現代日本の開化」『社会と自分』：41-82頁 東京：実業之日本社  
 西本 翠蔭 1906「趣味教育」『趣味』第1巻3号：24-26頁 東京：彩雲閣  
 芳賀 矢一 1906「文学的絵葉書を作れ」『ハガキ文学』第2巻1号：25-26頁 東京：  
 精美堂  
 細馬 宏通 2006『絵はがきの時代』東京：青土社  
 南 博・社会心理研究所 1987『大正文化 1905-1927』東京：勁草書房  
 明治文化研究会編 1969『明治文化全集 別巻』：東京：日本評論社

“*Bijutsu*” as a Hobby: The Popularization of Art Appreciation  
among Ordinary People in the Taishō Period

IMAI Hiroko

Abstract

The Japanese word *bijutsu* (art) is said to have been created in the Meiji Period, to accompany the idea of art imported from the West. There are many preceding studies on how the new concept of *bijutsu* was constructed, given meaning and spread among intellectuals or people familiar with art, led by the Meiji government. In this paper, I point out that the concept of *bijutsu* was gradually diffused among ordinary people with the appreciation of its artworks as a hobby which refined their tastes in the early decades of the 20th century.

People began to have their own hobbies (*shumi*) at this time of development of consumption culture in cities, and magazines about hobbies titled “Shumi” or “Shumi no Tomo” were published in 1900s-1910s. They carried articles about different genres of hobbies, including *bijutsu*, ranging from Japanese-style paintings to even postcards with pictures designed by young painters. These magazines were intended to enable people to enjoy art easily and inexpensively or as a hobby, which means, in a sense, commercialized art. More and more people began to enjoy *bijutsu* as a hobby, although it was not until the Shōwa Period that the concept of *bijutsu* was generally accepted.

**Keywords:** Art, *bijutsu*, Taishō Period, hobbies, *shumi*, Kuroda Hōshin, *ehagaki*, illustrated postcards